

町家におけるカッテの位置

—檜川村伝統的建造物群保存対策調査から

はじめに 平成15・16年度の2ヶ年で、檜川村の平沢地区において伝統的建造物群保存対策調査をおこなうこととなった。調査は来年度も引き続き継続しておこない、報告書を刊行する予定であるが、本稿では今年度の調査を通して垣間見えた、平沢地区の町家におけるカッテの位置について、近世から現代にかけての変遷とその要因について考察してみたいと思う。

檜川村平沢地区 檜川村は長野県西南部に位置し、村内には南北に旧中山道が縦断、木曾十一宿の最北端である贅川宿とその南の奈良井宿が所在している。檜川村では、奈良井宿が昭和53年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、近世における宿場町の情景が今なお色濃く残されている。

平沢地区は、近世に中山道に沿って形成された在郷町であり、贅川宿と奈良井宿の間、奈良井宿寄りに位置する。近世から漆器生産が盛んであり、現在でも多くの漆器店が軒を並べ、平沢で生産される木曾漆器は日本三大漆器のひとつに数えられている。平沢地区は奈良井宿とは異なり、江戸時代まで遡る建物が存在する一方で、大正時代から昭和初期のいわゆるレトロ調の建物や和風住宅も存在し、近世から現代に続く表情豊かな町並みが形成されている。

カッテ 現代住宅でいうところのリビングダイニングキッチン(LDK)とでもいうべき部屋を、平沢地区の町家ではカッテあるいはオカッテなどと呼称していた。町家の中では最も大きな部屋であり、イロリが設けられ、カマドもカッテに面した土間に置かれていた。カッテは、家族のだんらんや食事の場だけではなく、普段の客の接待や近所の寄合などにも用いられていた。このように、いろいろな場面で使用されたカッテは、板敷の場合が多く、その広さは一般的に8畳であるが、大きなものでは20畳におよぶものも存在していた。

カッテの位置とその要因 一般的に、町家では敷地奥へとつながる通り土間を持つ建物が多い。平沢地区の町家も例にもれず、大半が通り土間(ドジ)を持っている。このドジに接して、表から3室(ミセ、カッテ、ザシキ)を取るのが、近世から近代の平沢地区における町家の標準的

な間取りである。すなわち、カッテは建物中央に位置することとなる。この時期の町家の多くは中二階建であるが、カッテ上部に二階や天井はなく、屋根まで吹抜となっている。カッテにイロリやカマドが存在したこと、屋根が板葺であったため燻す必要があったことなどから吹抜としたのであろう。ひるがえって考えれば、この燻すことこそ、カッテが建物中央に配された最大の要因ではないだろうか。聞き取り調査によれば、カッテが附属屋となる昭和24年建立の町家では、煙を家の中にまわさないの家が持たないとのことで、あえて煙を総二階の主屋の方へと導いていたという。屋根が鉄板葺に変化してもなお、このようなことがおこなわれるほど、煙をまわして燻すことが重要視されていたのである。

大正末期から昭和初期にかけて、このカッテの位置が変化するとともに、それまで中二階建であった町家が総二階建となる。カッテは奥へと追いやられて附属屋あるいは別棟の建物となり、主屋の間取りは2室(ミセ、ザシキ)構成となる。このような変化の要因のひとつには、屋根葺材が板から鉄板に変わったことがあげられよう。つまり、これまでのように燻す必要性がなくなったのである。かといって、カッテにはカマドやイロリがある。そのため上部に2階をつくったとしても煙が充満して使えたものではない。したがって、カッテは主屋とは構造的に切り離された平屋の附属屋または別棟の建物へと変化したのではないだろうか。

あるいは、燻す必要性がなくなると、カッテは生活上都合の良い奥へと移され、それにとまって主屋が総二階建へと変化したのかもしれない。カッテにあったイロリが次第に撤去されるのも、家電製品の普及だけではなく、燻す必要性がなくなったことと無関係ではないだろう。

その後、昭和30年代後半から40年代にかけてガスが急速に普及、カマドに取って代わり、カッテが総二階建の主屋に取り込まれていく。しかし、その位置は奥のままであった。煙が出なくなったとはいえ換気の必要性などから建物中央ではなく奥に置かれたのであろう。

このように平沢地区の町家におけるカッテの位置は、建築材料の変化などによって、昭和初期に建物の中心から奥へと変化するのである。同様に、建物の外観も変化するのであるが、両者の相関関係については今後の課題とし、さらに調査を進めていきたいと思う。(西山和宏)